

明治初期における佐賀藩札整理の一考察

——交換比価決定の様相——

長 野 暹

目 次

- 一 はじめに
- 二 佐賀藩札と新貨との交換比価の決定過程
- 三 佐賀藩札と新貨交換開始時の藩札残額
- 四 佐賀藩札と新貨との交換開始時の様相
- 五 むすびにかえて

一 はじめに

維新政府の貨幣制度統一化政策の進展状況を検討することは、明治国家形成の様相を解明する上で肝要なことであらう。そこで本稿では、維新政府が出した藩札と新貨幣との交換の問題を佐賀県について考察してみよう。⁽¹⁾

維新政府は、一八六九年五月に銀目廃止の政策を出す。これは銀経済圏であつた関西以西の地域には大きな影響

を与えたとみなされる。ところで、維新政府は藩札と新貨との交換比価の設定において、銀価格は廃藩置県時つまり一八七一年七月十四日の銭相場を基調にすることを定め、銭相場がない場合には、東京・大阪の銭貨の平均相場を交換比価とすることにした。これは銀目廃止によって、銀相場は存在しないということが前提にされていた。しかし、一片の指令で銀貨流通がなくなるわけではなかった。このため銀札など銀建て藩札が発行されていた地域では、新貨との交換比価の設定が大きな課題になった。交換比価が低く設定された場合には、藩札所持者は損失を蒙むことになる。この交換比価の設定の様相を検討することは、藩札をめぐる維新政府と県及び地域住民との矛盾の解明にもなるであろう。

藩札が新貨と交換されるにおいて、藩札の残存額を検討しておく必要がある。藩札は正租や石代納金などに用いられ、これらによつて納入された藩札分だけ回収されたことになる。流通量の減少である。流通量を検討しておくことは、藩札整理の進展を検討する場合必要なことであろう。

次に藩札と新貨との交換がどのように行われたかを検討することも肝要なことであろう。これは政府の藩札回収政策の地域社会での進展度の検討ともなろう。本稿では、これらを交換開始時について検討しておく。

注(1) 明治初期の佐賀藩の藩札状況については、拙稿「明治初期における佐賀藩札状況」(『佐賀大学経済論集』二十三巻二号)参照。

二 藩札と新貨との交換比価の決定過程

新貨条例に基づいて発行された貨幣と藩札の交換比価設定については、政府が一八七一年七月十四日に指示を出し、七月十四日の藩札相場を基準にすることを命じた。これは銀価格で流通していた藩札に対する措置であったが、

ここにおいては錢相場を基本にすることが定められていた。一八六八年五月の銀目廃止が打ち出され、銀札は錢札として流通させることが求められていたことによるものであった。

佐賀藩は安政三年に銀札を発行したが、新貨との交換においては、この銀札と新貨との交換価格の設定が肝要な課題であった。一八七二年七月二十九日に佐賀県は大蔵大輔井上馨宛に「元佐賀藩札之儀ニ付御届¹⁾」と題する書類を提出した。それは次のように佐賀県の意向が書かれていた。

旧藩之管内限通用之紙幣去辛未七月十四日之相場ヲ以追而御引換被仰出^レ未、銅貨之品位新貨相当ノ定価被相定、新貨ト旧藩札ト価格比較表追々上木言々後日不都合無之様算則才四条之解御達相成、然^レ元佐賀藩之儀錢相場無之^レ処^レ辛未七月十四日銀札六拾八匁ヲ以金壹両ニ換候旨御届^レ儀ニ有之、其頃下方通用纔之小錢代用ハ耳白錢壹枚ヲ以銀六厘ニ換ヘ致通用來候ニ付、右算當ヲ以而七月十四日之錢相場ヲ相立^レ得^レも、銀札六拾八匁ハ丁錢拾三貫六百文ト相成、今般口達才二則之解ニ照シ候^レ而も、其節之錢相場定額以上ニ付、真ニ其割合ヲ以新貨ニ比格いたし低昂無之儀ニ相当不申、勿論円錢之唱行布告被仰出^レ依銀札六拾八匁ヲ以新貨壹円錢^{之割合}ニ拾貫文ニ致通用候様下方江相達置^レ、然ルニ隣県三藩ニ而も旧柳川藩札之儀ニ付、下方動揺いたし候由ニ而、其説管下ニ推移下民徒ラニ疑懼ヲ抱キ自然不融通可相成趣ニ付、尚又今般之御達ニ基キ疑惑不致様篤ト諭達イタシ置候、依而別紙較表相添此段御聞置迄御届仕候也

壬申

七月廿九日

大蔵大輔井上馨殿

佐賀県参事香川忠武

佐賀藩発行の藩札に言及しているが、佐賀藩では「錢相場無之」と錢貨の通用がなく、小錢代用として耳白錢一枚を銀六厘の相場で通用させてきたとある。このことから銀札六八匁は丁錢一三貫六〇〇文に相当する旨を記している。新貨との引換相場は銀札六八匁を金一元と定めており、また、柳川藩札の値崩れがあり、それが佐賀藩にも

影響していることを記している。

ところで、この上申書では、銀六八匁が金一匁に相当するとしている。これは交換比率では低い方ではなかった。この交換比率の問題は政府案とは相異するようになったが、ここで佐賀藩内の銀相場について検討しておこう。

文政期の佐賀藩内の金銀比価を長崎街道の宿駅牛津町の富商野田家の「日記」から検討すると、文政五年十二月には「金ハ銀ニ六十三匁懸ル²」とあり、文政七年四月に「金ハ銀ニ六十五匁懸ル也³」とあり、また、天保十年八月廿二日には「金銀之相場立、金ハ銀ニ六十三匁替、銀直段ハ百五文ニ成リ、御定也⁴」とある。文政期と天保期には、銀は金一匁に対して六三匁から六五匁であったことが記されている。

佐賀県が一匁が銀六八匁とすることを求めたのは、文面にあるように、従来の慣行によるとしている。錢流通が少なく、錢相場を基準として銀価格を設定することでは不利をきたさざるをえない。後にみるように、佐賀藩においては、藩札の中でも多量の小額札が発行されていることから、藩札が日常生活でも主要な通貨としての役割を果たしていたとみれる。このことからすると、佐賀県が銀六八匁を新貨一匁としたのは、従来の仕きたりに基づくものと解せられる。これはまた、明治初年における貢租などの納入に際して用いられてきた相場であった。例えば、

一八八二年五月十日届の「旧佐賀藩製造楮幣高并準備金目安」において、⁵

一 銀札四万三千五百九十五貫五百式十式匁 従前製造幣 此金六十四万千百十匁式分永百二十二文 辛未七月十四日相場 金壹両 二付銀六十八匁替

と書き出している。そして「右旧藩中製造之楮幣当時通用高内訳等書面之通相違無御座候也」⁶とある。

また、一八八二年五月十日付の「旧佐賀藩製造楮幣高并準備金目安」では、⁶

一 銀札四万三千五百九十五貫五百式十式匁 此金六十四万千百十匁式分永百二十二文 辛未七月十四日相場 金壹両 二付銀六十八匁替

とある。ここにおいても金一匁が銀六八匁替で設定されている。これらからすれば、佐賀藩においては、金一匁は銀六八匁に当たるとするのが慣しであったと解せられる。藩札が領内では主要な通貨だったので、金貨との交換は

それほど必要性を領内ではもっていなかったとみなされる。

一八八二年七月十四日相場として、佐賀県が銀六八匁を新貨一円としたのは、佐賀藩での慣行に基づくものとみれるが、政府が設定した相場は新貨一円に対して銀七四匁八分であった。銀札通用が一般的であり、金目貨幣との交換もそれほど領内では必要としなかったが、新貨との交換においては、ただちに所持している藩札額に影響することになった。

佐賀藩の上申に対して、政府は次のように指示している。⁹⁷

書面元佐賀藩製造銀札之義戊辰年五月銀通用停止相成候節、錢幣ニ改造可致筈之處、依然銀称通用致居候上も銀札照合価格比較表相定候規則ニ付、錢相場可届出旨辛未十二月中相違置候ニ付速々可申出處、督促受候而も不申出、不經伺私ニ較表ヲ作り下方江布達候段不都合之到ニ付、右布達を早々取消取扱之官員心得方可申出候、且今般申出候耳白錢一枚銀二里ニ換銀札六八匁ハ調錢十三貫六文相成候ト之義ハ僅ニ数枚之錢相場ヲ推算致シ候者ニ而、全前同日人片取引金匁兩ニ付而之相場ニも無之ニ付取用難相成候条、前同日東京大阪ニイ附平均九六錢十匁實三百六十匁之相場ニ相定、銀錢照合銀七四匁八分之割ヲ以価格比較表上木出来次第可相渡、夫迄ノ間右割合ヲ以通用可致事

壬申
九月五日

大蔵大輔井上 馨(印)

ここで問題になっているのは、(一)錢相場を届け出ることを指示しているのに、督促を受けても届け出ていないこと、(二)指示を経ずに、勝手に新貨幣と藩札の比較表を作成し、県下に布達したこと、(三)銀と錢との比価の算定の根拠が薄いこと、(四)銀札は東京と大阪の平均相場七四匁八分を用いることなどである。ここでは錢相場のことが問題になっている。これは政府の一八七一年十二月に藩札相場の算定について四項目を出していたことよっている。その第二則に

銀札ハ各場辛未七月十四日ノ銀錢相場ニ照合シ其錢ノ額員ヲ算出シオ一則ノ算則ヲ以テ新貨ノ相当ヲ定ムとあり、銀貨の錢貨に対する相場で算定することを指示していた。それゆえ、錢相場が基準になった。九月五日の佐賀県に対する「達」の中で銀札六八匁が調錢一三貫六〇〇文としているのは、僅に数例の錢相場から算定したにすぎないとし、算定の根拠が薄いと指摘したのも錢相場を基準にしていたことによる。

政府の銀目廃止の影響は銀經濟圏では色々と影響が出たが、佐賀藩でも藩札が預金札となり、安政期が預銀札であつたのと比べると、大きな変化を示していた。これは銀札中軸で流通していただけに、かなりの混乱をもたらしたとみれる。安政期の銀札、明治二年の金札と佐賀藩領内では、銀目、金目の兩種の藩札が流通しており、これが混乱の要因となつたが、新貨と藩札との交換比価設定においては、銀札が問題になった。銀札流通は銀目廃止によつて名目的にはないこととされたが、現実には流通していた。それだけに、新貨との交換比価は大きな課題であつた。

政府が佐賀県が算定した銀六八匁を金一円とすることを認めなかつたことに対して、同年九月十日に次のような問い合わせが佐賀県内で出されている。⁹⁾

別紙御附紙之内錢幣ニ改造可致筈之処、依然銀称通用致居、督促受_レ而も不申出之義者主務之官員いつ連とも恐入義ニ候得、申せじ、不經伺私ニ較表ヲ作り及布達候義ハ円錢之唱御達ニ依テ唱ヘテ致布達候義ニ付、強而右ニ付而錢銀之相場高下致義も無之処、七月十四日東京大坂式ヶ所平均相場ヲ以県札銀目相定比較相成_レ義如何之次第候哉、県地申越候而も尋越可相成、出張所おゐても了解不致ニ付、紙幣寮尋合候処、唯小錢之相場ヲ推シ拾三貫六百文相成_レハ壹兩之錢相場無之訳ニ付、各県共前同日錢相場無之向も右ノ割ヲ以比較表被相渡候分申答相成、勿論右義一般之人氣ニ關係不輕事柄_レハ大ニ懸念之筋ニ付、香川旧参事江も打合今一応給受元致再願方ニも可有之相談_レハ共、事柄出張所限ニ而何分難差出ニ付、差越申_レ義、御再願之義相成_レハ至急御差越相成度_レ、

此段申越ひ也

壬申

九月十日

中隈源四郎

藤瀬真定

中山 典事殿

武多權典事殿

大森權典事殿

ここでは、七月十四日の東京・大阪平均相場で県下の銀札相場とする理由が問題になっている。県地に問い合せても不明であり、出張所でも理解できず、それゆえ紙幣寮へ問い合せたら、一両に対する錢相場がない場合には、東京・大阪平均相場を用いるので、これに従った比較表を渡した旨の返答があったとしている。しかし、これは容易ならぬことなので、再願の方向で出張所は相談しているが、出張所では処理できないことなので、本庁に申し出たとしている。

東京・大阪平均相場で換算価格を設定することについて、その事情がよく理解されていないことと、設定について危惧を懷いていることが言明されている。

このようなことから、佐賀県は同年九月二五日に「佐賀藩之義ニ付再願」と題する上申書を井上大蔵大輔に提出した。次のような内容である。⁽¹⁰⁾

元佐賀藩札之儀錢相場無之処ヨリ辛未七月十四日ノ銀札六十八匁ヲ以金一兩ニ換候旨御届仕儀ニ有之、其比下方通用纔之小錢代用ハ耳白錢一枚ヲ以銀六厘ニ換ヘ致通用來候ニ付、右算当ヲ以權ニ七月十四日之錢相場ヲ相立候得ハ、銀札六拾八匁ハ調錢拾三貫六百文ト相成、因テ御布告ニ照シ新貨トノ比較低昂無之儀ニ相当可申、勿論円錢之唱ハ御布右被仰出い後、預札六拾八匁ヲ以新貨一円ノ割ニ致通用い様、猶又下民疑惑不致タメ較表取立相達

置い段御届仕い処、錢相場之義督促受候テモ不申出経伺私ニ較表ヲ作、下方へ布達い段不都合之至ニ付、右布達ハ早；取消取扱之官員心得方可申出旨、且今般申出候耳白錢一枚銀六厘ニ換銀札六拾八匁調錢拾三貫六匁文相成候ト之義ハ、僅ニ数枚之錢相場ヲ推算致候者ニテ、全前同日人民取引金一兩ニ付テ之相場ニハ無之ニ付、取用難相成い条、前同日東京大坂ニケ平均九六錢拾壹貫三百六拾壹文之相額ニ相定、銀錢照合銀七拾四匁八分之割ヲ以価格比較表上木出来次第可相渡、夫迄之間右割合ヲ以通用可致旨御附紙之趣奉畏候、依然銀称通用等致居ノ儀ハ何レ共奉恐入儀御座候、不経伺私ニ較表取立下方へ及布達候ハ円錢之唱御達ニ依り去ル五月中右唱替割合表相達置、猶又現今下民了解致兼候者勝有之、自然疑惑ヲ生シ、不融通等相成候テハ不相濟義ト再応較表取立五拾六入ノ法ニヨリ論達イタシ候迄ニテ全ク銀錢之相場高下等致シ候儀ニ而御座候、且耳白錢一枚銀六厘ニ換銀札六拾八匁ハ調錢拾三貫六匁文ト相成候義ハ一兩之相場ニ無之訳ニ付、東京大坂ニケ所相場平均価格表上木被下渡旨、右ハ從來下方取引筋正金藩札ノミニテ錢楯無之隨テ相場モ無之訳ニハ候得共、小錢代用ハ耳白錢一枚ヲ以銀六厘ニ換候上ハ、一口之取引銅錢ノミニテ取遣候節ハ則右之割合ヲ以交換イタシ候現業ニ有之候処、更ニ東京大坂相場ヲ以価格被相定候通ニテハ一般違算ト相成、取引筋及混乱候次第ニ有之、因テハ現業相運候ヲ拠ニシテ則銀札六拾八匁ヲ以新貨一円ノ價格被相定度、右ハ元佐賀管内一般人氣ニ関シ不容易義ニ付、今又年実御諒察シ上前文御聞届成度、此段奉再願候、以上

壬申
九月廿五日

井上大藏大輔殿

佐賀県權令多久茂族(印)

ここで指摘しているのは、以下のようなことである。その一つは、一八七二年七月十四日の相場は銀札六八匁を金一兩に換算したことである。その理由として、佐賀藩では錢相場がないが、少量の小錢が使われており、その相場は耳白錢一枚が銀六厘に当るので、それを基に七月十四日の錢相場を算定すれば、銀札六八匁が調錢一三貫六〇

○文になり、それは新貨一円に相当するということをあげている。二つは、政府が錢相場の算定が僅か数例によるものでしかないとしているが、元来佐賀藩においては取引は正金と藩札のみであり、錢取引はなく、錢相場がないが強い相場をとれば耳白錢一枚が銀六厘に当たるので、その相場を用いたとしていることである。このようなことを述べた上で、銀札六八匁を新貨一円に価格設定することを求めている。東京・大阪相場で換算価格が設定されれば、「一般違算ト相成、取引筋及混亂」、「元佐賀管内一般人氣ニ関シ不容易義ニ付」と指摘している。

錢相場算定のが基本的な事項になっている。一八九一年十二月の新貨と旧楮幣価格比較の算定において出された「算則」でも、錢相場を基準にすることが規定されていたが、政府が錢相場を基にする方針をとったのは、次のような事情があつたとみられる。

一八七二年六月九日に大蔵省は藩札と新貨の換算について布達を出しているが、その中で「従前銀札ノ分戊辰年八月中銀通用停止ノ後錢札ニ改造亦ハ銀札ノ俣錢札ニ代用致居候分ハ同十二月二十二日御布告ノ銅貨單位ニ比格(一九八一年)シ」との文言がある。これによれば、一八六八年八月に銀流通が停止され、従来の銀札は錢札に改造するか、銀札のままでも、それを錢札として流通さすことが求められていた。この錢札を基に換算することを指令している。銀札の流通が禁止され、銀札は錢札とする方針が出されていた。それゆえ、政府としては、銀札の流通はなく、流通しているのは金札か錢札のみという前提であつた。一八七一年七月十四日の新貨との換算において、金札の場合は、七月十四日の相場で直ちに新貨の価格が決定できたが、銀札の場合は、錢札として流通させていたから、七月十四日の錢相場を定め、それから新貨との交換価格を算定するという方式をとった。銀札の交換価格設定で錢相場が問題になるのは、このような事情による。

佐賀藩の場合は、正金か銀札の流通が基本で、錢流通が殆んどなかったことから、政府がとる新貨との交換価格算定では、多くの問題を抱えることになった。「元佐賀藩札之儀錢相場無之処」(註)とあり、錢相場それ自体がなかつ

た。それゆえに、若干用いられていた耳白銀一枚が銀六厘に相当していたのを基準にしている。佐賀県はこのよう
な事情を基にして、銀六八匁を新貨一円にすることを再度要望した。それには幕藩期の通貨制度に由来する認識が
あった。幕藩期には金銀錢三種の貨幣が流通していたが、とりわけ金銀貨においてはそれぞれ貨幣相場があった。

公的には金一兩は銀六〇匁であつたが、これは実際には変動していた。佐賀藩では銀札が主に流通していたが、金
銀相場では先述のように、幕末期には金一兩に対して銀相場は六三匁位であつた。これが明治初年に六八匁とされ
たのは、其後の経済変動の影響によるものとみれる。金一兩が新貨一円とされたことから、銀六八匁は金一円にな
るという算定になる。佐賀県は銀六八匁は金一兩ということを基準にして、銀札と新貨との交換価格を設定したと
みれる。銀札相場に言及しているのは「算則」が銀札を基準にすることを定めているのによるとみられる。九月二
十九日に「佐賀藩札之義ニ付再申上書」が作成されているが、それには、この間の事情が記されている。次のよう
な内容である。⁽¹³⁾

佐賀藩札之義ニ付、去ル第一百五十二号附ヲ以再願仕候処、尚又左ニ申上候、抑佐賀藩銀相場之義ハ藩札発行後ヨ
リ数十年來銀六拾八匁ヲ以テ金壹兩ニ換換テ低昂無之人民慣習ノ久シキ無疑念通用イタシ候ヨリ去ル辰年銀通用
御停止之節モ昔倂据置不相改、其節取扱之官員不都合之義奉恐入候得共、時ニ相場高下有之候藩札トハ聊相違可
有之、然ルニ先般御達之通辛未七月十四日錢相場無之候迎、東京大坂相場平均七十四匁八分ヲ以テ比較表御取建
相成候、然ルニ於テモ下民之難渋不成一ト方、右ハ札位下落之譯ニ無之段兼而御諭達も有之不都合ハ無之筈ニ候
得共、現際下方ノ通用数十年來六十八匁ヲ以テ壹兩ニ換來リ候処、俄ニ六匁八分ノ差相生シ候テハ諸取引貸借ニ
至ル迄損耗ノ姿ニ相当リ、下民之情実不得止次第或ハ一時ノ動揺ヲ釀候哉モ難測、殊ニ右藩札之義ハ廿匁札ヨリ
貳分札迄有之、五匁以上ハ金貨之直段ニ相当リ、諸取引貸借共金貨同様之取扱イタシ候儀ニ付、旧銅貨当百錢等
八十文ノ価値ニ比較相成候トハ通用之際大ニ差別有之、將又錢相場確然不相立候モ到底普通之銅貨稀少ニ付、自

然藩札ノミ相行レ居候ヨリ錢相場無之姿ニ推移リ候義ニ而錢一口ニ交換イタシ候得ハ、兼テ申上候通壹両ニ付耳白錢拾三貫六百文之相場ニ相成申候、且当壬申年御收納石代納之分ハ既ニ六十八匁ノ割ヲ以テ取立候央更ニ比較相違イタシ候テハ一種両様ノ相場ニ相成不公平ニモ可相当、旁以テ差支之事情深ク御諒察被成右銀六拾八匁ヲ以テ金壹兩ニ比格相成候様御許免有之度、此段再三申上候也

壬申
九月廿九日

井上大藏大輔殿

佐賀県權令多久茂族

ここでは、次のようなことを主張している。その一つは、佐賀藩では藩札発行以来の数十年間、銀六八匁を金一両としてきたこと、一八六八年の銀通用停止を命じられた折も、そのまま据え置いたことを指摘している。銀六八匁が金一両とするのは永年の慣行であるとしている。二つは、政府が東京・大阪平均相場を用いて新貨との交換価格を定めると、県内の取引きに支障をきたし人々が動揺することを記している。東京・大阪平均相場七四匁八分を用いると、佐賀藩内の慣行に基づく価格六八匁に対して六匁八分の差が生じ、佐賀県民にとって不利になるとしている。政府価格を用いると約一〇%の切り下げになる。三つは、すでに石代納などでは六八匁の価格で徴収しており、新に交換価格を設けると混乱が出るとしている。

七月十四日の平均相場が新貨と藩札との比価となったことから起った問題であるが、東京・大阪平均相場を政府が佐賀県に設定するようになった経緯は必ずしも明らかでないけれど、佐賀県側にも原因があるようにみられる。再願の中に佐賀藩では錢相場がないので耳白錢一枚が銀六厘に当たるとして、これは銀札六八匁、調錢一三貫六〇〇文になるとの計算に由来するとしている。しかし、この計算が数枚の錢相場から推算したことによるものであり、金一兩の取引相場でないことを問題にしている。佐賀県が七月十四日に金一兩の銀相場を計上しなかったことが、政府として、東京・大阪の米平均相場を用いさせた要因とみなされる。

表 1 佐賀藩設定の銀札
と新貨の比価

銀 札	新 貨
2 分	3 厘
3 分	4 厘
5 分	7 厘
8 分	1 錢 2 厘
1 匁	1 錢 5 厘
2 匁	2 錢 9 厘
3 匁	4 錢 4 厘
5 匁	7 錢 3 厘
8 匁	11 錢 8 厘
10 匁	14 錢 7 厘
15 匁	22 錢
20 匁	29 錢 4 厘

「官省違達」(明治五年自六月
到八月)より作成。

銀目停止に伴う通貨措置が問題にされている。銀目停止で銀貨流通はなく、金貨と錢貨のみの流通になっている筈であるという前提で政府は事を進めている。しかし、銀目廃止の指示の中で銀貨流通が簡単になくなるものではない。佐賀藩は、一八六九年の藩札発行では金札を発行したが、安政期に発行された大量の銀札を金札または錢札に換えることはしていなかった。それゆえ、銀札の新貨との交換が問題になっているが、政府は、銀目廃止の折の指令に従っていないことを咎めている。

ところで、佐賀県は銀六八匁を金一匁とした折の交換比価を作成し提出した。表 I のようである。

銀札六八匁が新貨一匁に相当するものとして、各種の銀札と新貨の比価を示したものである。佐賀県としては銀札六八匁が新貨一匁と比価することを主張していたことによる。

新貨に換算して三厘から二九錢四厘までの十二種目の銀札が発行されていたことが出ている。佐賀県が主張しているように、銀札のみで、領内の貨幣は充當されていたと解せられる藩札発行状況にある。

政府は佐賀県の再願及び再上申に対して、次のように指示している。

一八七二年九月二十五日の「佐賀藩札之儀ニ付再願」に対しては

書面申立之越も一般之差響ニも相成難聞届候条、先般及差回候通可相心得候事と、十月十七日に大蔵大輔井上馨名で指示し、申立を聞き届けたのでは、一般にも影響するので聞き届け難たいとしている。また同年九月二十九日の再願に対しては

書面佐賀藩造銀札相場之義、数十年来六拾八匁低昂無之処、今般銀錢比較ニ依り歩越諸取引下民損耗相立候と之

義者、其管下ニ限候義ニ無之候、元来普通之銅貨稀少藩札而已被行、錢相場無之趣ニ付、特別之法方東京大坂辛未七月十四日之平均相場ヲ以比較之儀相達候処、錢一口ニ交換致候得者金壹兩ニ付耳白錢拾三貫六百元之相場ニ相当り候由者有名無実ニ而一口ニ多分之正錢取引も必無之筈旁再三之願ニも候得共、他之響ニも相成難聞屈筋ニ付、右次第了解最前及指揮候通相心得下方へ篤と及説諭候様可致候事

と、十月十八日に同じく井上馨名で指示している、錢相場がないので、金一兩を耳白錢一三貫六〇〇文として相場を出しているのは、有名無実な措置であり、また、一口で多分の錢取引もない筈なので、願いは聞き届け難いとしている。

政府は佐賀県の要望をいずれも認めていない。「他之響ニも相成」と要望を承認すれば、他への影響が大きいとして却下しているが、これは同様な課題が各地でも生じていたことからくるものであろう。これは政府の政策が可成り無理を含んでいたことによる。一八九八年八月に銀流通を禁じ、金貨と錢貨の流通に統一することを目指したが、これは銀建であった地域ではかなりの混乱を伴った。一片の指令のみで、従来慣行を急に改めることも簡単にできるものでなかった。しかし、政府は藩札整理に際しては、銀流通はないとの前提で対応した。「新貨幣旧藩製造楮幣価格比較」に際しての価格決定について基準となる「算則」を出したが、これも先述のように金・錢相場が基準とされ、銀札の場合も「銀錢相場ニ照合シ其錢ノ額員ヲ算出シ」と錢相場が基準になっていた。

銀目を廃止し、金貨と錢貨での通貨に統一しようとしたが、これは銀建地域では大きな混乱を伴う措置であった。佐賀藩では銀札流通が主で錢相場も立たなかったことから、銀目廃止の措置は著しい影響を蒙った。金一兩を銀六八匁としてきたのを、銀七四匁八分にした政府の態度は、銀目廃止の措置を前提にしたものであり、現実的には可成り無理を伴ったものである。藩札比価の設定で、この措置を推進するような決定を政府がしていることは、貨幣面で人々の反感を招く内容であった。

注 1) 「官省進達」明治五年自六月到九月、第六十六号。

(2) 『野田家日記』(西日本文化協会、一九七四年) 四九頁。

(3) 同右、五三頁。

(4) 同右、八八頁。

(5) 「官省進達」明治五年十一月分。

(6) 同右。

(7) 「官省進達」明治五年自六月到九月。

(8) 「法令全書」明治三壬申六月 大蔵省第三号。

(9) 「諸願伺届書控」明治五年。

(10) 「官省進達」明治五年自七月到十一月。

(11) 「法令全書」明治五壬申年六月、大蔵省第七十三号。

(12) 「官省進達」明治五年自七月到十一月。

(13) 同右、明治五壬申九月ヨリ十月迄第百五十八号、「諸願伺届控」明治五年第十三号置県前書類。

(14) (15) 「官省進達」明治五年自七月到十一月。

(16) 「法令全書」明治五壬申六月、大蔵省第七三号。

三 藩札と新貨交換開始時の藩札残額

佐賀県は維新政府との交渉で金一円につき銀六八匁に設定することを求めたが、政府はそれを認めず七四匁八分にすることを指示した。佐賀県の要望額の九〇%であり、これによって佐賀藩札は切り下げによる交換となった。金一円につき銀七四匁八分で交換されるようになったが、安政期と明治二年に発行された膨大な藩札は交換開始時にどの程度であったかを検討しておこう。石代納の推進によって貢租が藩札で納められるようになったことなどに

よつて、既発行の藩札が回収されていたので、発行額そのままが交換額ではなかった。これは藩札の回収状況がどのように進展しているかの検討ともなるので、以下で若干の考察をしておこう。

一八七二年十一月十八日に佐賀県權令多久氏族と同参事石井邦猷は井上大蔵大輔に「元佐賀藩製造銀札御引換ニ付願」と題する次のような書類を提出した。¹⁾

元佐賀藩製造銀札之儀金壹円ニ付銀札六拾八匁換ニシテ通用致シ来候処、錢相場無之ニ付東京大坂平均相場之比較ヲ以テ銀札七十四匁八分ヲ新貨壹円ニ被相定候段去月十八日出ノ御指令、同月廿八日到着ニ付右御改正之御趣意ヲ以テ及論達、翌廿九日別紙比較表之通令通用候、就テハ旧藩発行通用之紙幣差向五錢以上ノ分ヨリ交換相始、五錢未滿之分ハ新貨相当之価位押印ノ上令通用候様先般被相達候ニ付、現今散布之銀札各種調書之内、五錢以上ノ分引換用新札ニテ四拾壹万三千円御下渡被下度、尤新札壹円以上ノ札而已ニテハ民間通用方不弁利ニ付、小札取交エ御渡被下度奉願儀ニ御座候、因テ大坂出張所紙幣寮宛之書狀御下渡被下度此段奉願候也

ここでは佐賀藩製造の藩札は金一円につき銀札六八匁で比価を定めることを求めたが、それが認められず、東京・大阪平均相場で銀札七四匁八分替にすることを十月二十八日に政府より指令され、そこで二十九日からその比価で通用させた旨を記し、次いで五錢以上の藩札を新札と交換するので、新札四一万三千円を下付することを求めている。新札との交換比価が金一円につき銀札七四匁八分と定められ、それに基づいた新貨との交換が進められつゝあり、交換額が四一万三千円ほどであることが窺える。

佐賀県は銀七四匁八分と金一円と交換することにしたが、この折に「元佐賀藩銀札製造高調」が作成されている。五錢以上と五錢以下に分けて計上されているが、内訳は表2のようである。

二〇匁札が三九万枚、一五匁札三四万、一〇匁札六四万枚、八匁札四三万枚、五匁札一五万枚と大量に発行されており、なかでも一〇匁札は、五匁札以上の中では他の二倍近く発行されており、一〇匁札が可成り流通の主軸に

表 2 佐賀藩札の銀札製造高と各札枚数

(1872年11月2日)

元佐賀藩銀札製造高調 壬申11月 佐賀県	
<hr/>	
銀札42,092貫19匁4分6厘	(朱書) 但1両ニ付68匁替, 銀札641,110両2分, 永120文 之内断裁支消高金2万2,110両1分, 永87文1分引テ
代金562,727円53銭3厘	但1円ニ付銀札74匁8分換
<hr/>	
内訳	
20匁札 390,789枚	代銀7,815貫780匁
15匁札 349,589枚	〃 5,243貫835匁
10匁札 644,685枚	〃 6,446貫850匁
8匁札 430,482枚	〃 3,443貫856匁
5匁札1,588,486枚	〃 7,942貫430匁
	ノ銀札30,892貫751匁
	但5銭以上
	代金413,004円69銭2厘 是ハ当節引換新札相願候高
	但1円ニ付銀札74匁8分替
3匁札1,582,427枚	代銀4,740貫281匁
2匁札1,410,625枚	〃 2,821貫250匁
1匁札1,980,366枚	〃 1,980貫366匁
8分札 34,000枚	〃 27貫200匁
5分札2,242,973枚	〃 1,121貫486匁5分
3分札1,658,949枚	〃 497貫684匁7分
2分札 20,000枚	〃 4貫目
	銭20文
	ノ銀札11,199貫268匁4分6厘
	但5銭以下
	代金149,722円48銭
	但1円ニ付銀札74匁8分替

注「官省進達」(明治五年十一月分)より作成。

表3 佐賀藩札の預金札製造高と残額

元佐賀県製造預金札調	
預金札553,694円6銭2厘	是ハ製造高
内	
預金札143,555円31銭2厘	是ハ辛未八月迄ノ内引換済最前御届前
同 15,000円	是ハ壬申九月大坂租税寮江上納前
預金札11,402円6銭2厘	是ハ2朱, 1朱手摺レ損札ノ分先般引換用御下渡相成リ, 新札2万円之内ヲ以引換候分
小以預金札169,957円37銭4厘	
差引	
残預金札383,736円68銭8厘	
預金札33,736円68銭8厘	是ハ壬申正税石代米当今回収納ノ見込ニシテ引去ル
差引	
残預金札35万円	是ハ当節引換相願候分

注「官省進達」(明治六年自一月到二月)より作成。

なっていたことが出てくる。また、五銭以下つまり旧藩札では三匁札以下では、三匁札一五八万枚、二匁札一四一万枚、一匁札一九八万枚、八分札三万枚、五分札二二四万枚、三分札一六五万枚、二分札二万枚となっており、枚数で三匁札以下の方が著しく多い。なかでも五分札は二百万台であり、可成りの枚数になっている。

銀札は五銭以上が四一万三〇〇四円、五銭以下が一四万九七二二円であつたが、藩札は明治二年に発行された預金札があつた。これは預金札一円は新貨一円で交換されるので、価格的には問題はないが、多量の発行であつたので、複雑な手数を要した。預金札の交換必要額をみれば、表3ようである。発行額五万三六九四円の中で、一四万三五五五円は一八七一年八月までに引換えられているとして、また、一万五〇〇〇円は一八七二年九月に大阪租税寮へ上納したとしている。更に二朱、一朱札は損耗度が高いとして新札と交換が終っている。これらは交換がすでに終っているの残額は三八万三七三六円であるが、この中で三万三八三六円は一八七二年の租税の石代納などで藩札のままで収納する分であり、結局三五万円が預金札で新札と交

換が必要な額となっている。

銀札と預金札において新札と交換が必要な額は、五錢以上の銀札が四万三〇〇四円、預金札が三万五千元となり、計七万三〇〇四円が交換高になる。

政府は先に藩札製造高と準備金額とを届け出ることを命じたが、これに対する佐賀県は届け出たようである。しかし、これには計算違いがあつたとして一八七二年六月二十三日に「楮幣調之義御猶豫願」と題する書類を大蔵省に提出した。⁽²⁾

元佐賀藩製造楮幣高并準備金御届之義、兼而進達仕置候処、違算之廉有之候付更ニ進達可仕本月廿日迄御猶豫奉願候処、未タ差越無之遅延之段如何ニも奉恐入候ニ付、至急本県へ申遣シ置候間、猶来ル七月十五日迄御猶豫被下置今又奉願候、以上

これはよれば、藩札製造高と準備金は届け出たことが分かる。しかし、それには計算違いがあつたとし再度提出するようになったが、その書類が間に合わないので、提出期限を七月十五日まで延期してほしいと申し出ている。十一月には届け出がなされているが、違算とされていることについて、次のように記している。⁽³⁾

準備金御届高之内目安不合御問合ニ付御届

元佐賀藩藩札準備金目安御届高四万五千六百六十七兩余之内訳ニ甲乙之目安御届不合之次第如何之訳ニ候哉取調可申出旨被相達、右目安之内甲ノ目安内訳金札五万兩余有之、乙ノ目安内訳ニハ金札貳万兩余ナラテ無之、申ヨリ乙ハ三万兩之不足相及候儀ハ素リ準備金ノ節ハ金銀官札等取交備置有之候処、官費用度筋正金或ハ金札ニ限り候入用方手支之節ハ準備金各種ノ内エ彼ト是ト交換致候ニ付、甲ヨリ乙ニ至リ各種之不同有之訳ニ候、偕又甲ノ目安有金ヨリ乙ノ目安有金増加致シ候儀ハ、甲ノ目安内訳ニ諸取替并物産基立江差出候□束テ金貳十六万四千六百十六兩金ノ内去十二月迄ノ円返済金取束乙ノ目安有金ニ相加ヘ置候ニ付、乙ノ有金増加有之訳ニ候、尤準

備金之内、古金之分ハ替付以前之俣ニ致シ有之候処、去ル戊辰年古金銀ト通貨トノ比較御改正ニ付別紙目安之通
間潰為相成儀ニ御座候

右旁之次等御問合ニ付御届仕候也

この届けによれば、準備金が四五万六六六七兩あつたことが分かる。大量の藩札交換において、その交換を容易にするための、準備金がかなりある。違算の問題は、甲の目安金札五万円としているのに、乙の目安では二万円となつており、この差三万円についての理由であつた。佐賀県は準備金は金銀官札などからなつており、官費入用の折には金銀貨太政官札で賄うため、それが手支えの場合は、準備金の内より支出するので不同が生じるとしている。ところで、この折に佐賀藩の準備金算出の内訳が記載されているので、これから一八七二年五月段階での旧佐賀藩札の有高について検討しておこう。

表5は、「旧佐賀藩製造楮幣高」で、表6それに基づく「準備金目安」の内訳である。「従前製造楮幣」として、銀札が四万三三五五貫五二二匁余であつたとあり、膨大な発行だつたことが窺える。

藩札は維新前と後とを合せての引き換え残金は一八七一年五月十日段階で一〇二万八一三九兩という膨大な量になつている。このうち、引き換え準備金は四五万六六六七兩要あるとしている。この金の準備金の計上の仕方は特徴的である。準備金四五万六六六七兩は銀札の有金四万七五二九兩と預金札四〇万九一三八兩の合計である。銀札のうち五七万一四七一兩は「返弁之目的難相付分」として計上されていない。預金札の中では貸付金など「返弁相成分」などは準備金の中に加えられていることから回収可能な分が準備金に計上されていることが分かる。このことから、準備金は旧幕府正貨、太政官札、貸付金回収可能金などから構成されていることが窺える。このうち、有金の一九万二八五〇兩は準備金の四四％である。それゆえ、準備金の中で確実なのは約半数程度ということになる。ところで、これら藩札のなかで、銀札は一八七一年八月までに引き換えられたのが二万二一〇兩であり、この

表 4 旧佐賀藩製造銀札派出官員江差出御仕譯書

金 額	内 訳
1. 銀札 43,555貫522匁 3 分	製造高
此金 641,110両 2 分, 永622文 内	
銀札 1,505貫972匁 8 分	旧藩中引換札巡廻林少丞立会焼却
銀札 155貫291匁 1 分	準備金之内貸付上り札, 前同断
残銀札 41,934貫258匁 4 分	流通高
同此新貨 560,618円42銭 8 厘	
此譯	
銀札 13,639貫565匁 7 分	於派出先交換高, 但内訳各種略之
銀札 11,238貫910匁 2 分	同断押印高, 但内訳各種略之
銀札 11,239貫692匁	諸上納之分, 但内訳各種略之
銀札 203貫888匁	比較表発令前於長崎県取立分, 但内訳各種略之
銀札 589貫472匁	比較表発令後, 右同断
内	
貳拾匁札 477貫80匁	
拾五匁札 304貫605匁	
拾匁札 428貫970匁	
八匁札 162貫192匁	
五匁札 285貫360匁	
三匁札 246貫917匁	
貳匁札 108貫388匁	
壹匁札 42貫813匁	
八分札 80匁	
五分札 9貫667匁	
三分札 2貫340匁 3 分	
小以 40,395貫388匁 2 分	
流通高と差引	
銀札 1,538貫870匁 2 分	散失
同此新貨 20,573円13銭 1 厘	是ハ交換札并諸上納之分差引書面之通り散失之事

注「官省進達」(明治六年五月六月分)より作成。

表 5 旧佐賀藩製造楮幣高

(壬申五月十日)

金 額	内 訳
従前製造楮幣	
1. 銀札 43,595貫522匁 3 分	
此金 641,110両, 永122文	辛未 7月14日相場金 1 両ニ付銀68匁替
内	
銀札 1,503貫502匁 9 分	是ハ辛未 8 月迄ノ内引替済
此金 22,110両 1 分, 永16文	
8 分	
残銀札 42,092貫19匁 4 分	
此金 619,001両 1 分, 永35文 2 分	準備金
内	
○金 47,529両, 永208文	是ハ当時有金
内	
正金 13,272両 3 分	
金札 34,256両 1 分 1 朱	
永 83文	
金 571,471両, 永77文 2 分	是ハ日進艦其外代并戊辰己巳 2 ケ年之内奥羽 出兵費用等ニ差出置返弁之目的難相付分
御一新貨製造楮幣	
1. 金預札 553,694両 1 朱	辛未 7月14日相場金 1 両ニ付金札 1 両換
内	
金 71,037両 1 朱	是ハ辛未 8 月迄ノ内引替済
同 73,518両 1 分	是ハ辛未 8 月引替済
残金預札 409,138両 3 分	準備金
内	
○金 144,521両 3 分, 永73文 2 分	是ハ当時有金
内	
正金 125,000両	
金札 19,521両 1 朱	
永 10文 7 分	
○同 189,500両, 永166文 5 分	是ハ諸取替等昨未10月迄ノ内返弁可相成分
○同 75,116両, 永760文 3 分	是ハ貸付金並物産基立等差出買候分

注「官省進達」(明治六年五月六月分) より作成。

表 6 佐賀県の準備金内訳 (乙)

準備金目安		壬申 4 月晦日
金 456,667両, 永958文	内	右準備金御届高
金 131,952両, 永750文		壬申 3 月上納
金 92,981両, 永454文 8 分		物産基立其外遣出置候分御届済
金 27,319両, 永915文 5 分		楮幣ニ付林大蔵少丞立合ニテ焼捨
金 244,393両, 永797文 7 分		当節上納 (今月)
内小訳		
金 108,489両, 永650文		草文小判22,369札代, 但取立直段 1 枚ニ付 4 両 8 合 5 勺替, 4 両 6 合替ニ引合
金 38,726両		保字小判91,112枚代, 但取立直段 1 枚ニ付 4 両 2 合 5 匁替, 3 両 9 合 6 勺 6 札625引合
金 7 両 1, 永929文 4 分		真文壺分判
金 31,181両		式分判
金 389両 2 分		壺分銀
金 200両		式朱金
金 30円		金貨
金 25,368両 3 分		金札
永 468文 3 分		

注「官省進達」(明治五年十一月分)より作成。

ため準備金としては六一万九〇〇一両になるとしている。しかし、このうち五七万一千四百一十兩は、日進丸の購入費、戊辰戦奥羽出軍費として支出され、有金は四万五千二百九兩であるとしている。銀札の九割はすでに支出されている。銀札は軍艦、戊辰戦費に殆んどが支出されており、藩財政がこの面で破綻状況になっていることが出ている。これを補うために急拠預金札が発行され、発行額も五万五千三百六十九兩と膨大なものになっている。この預金札においても、有金は一万四千五百二十一兩で八割がすでに支出されている。預金札においても、財政支出がなされ、この面からも財政支出度が高まっている。藩札の発行は、財政逼迫のために行われており、大量の発行がなされているが、それだけに物価騰貴などの影響がでたとみなされる。

準備金四万六千六百七十三兩三分があり、このうち九千二百五十八兩は貸付金二万四千六百一十六兩余のうちの一万一千六百三十五兩の返金を引いた残金である。また、二万七千三百三十九兩はすでに引き換え済みの藩札で焼却された分である。これらを差引くと三万三千六百三十四兩が準備金であるが、三月にすでに一万一千九百二兩が上納しているもので、その残金は二〇万四千三百三十九兩で、これが今回の上納分であるとしている。このうち一〇万八千八百九兩は草文小判二万二千三百六十九枚の代金、三万八千七百二十六兩が保字小判九百一十二枚の金額であり、また太政官札も二万五千三百六十六兩ある旨を記している。これらからすれば、旧幕府貨幣が可成り蓄積されていたことが窺える。

これからして、佐賀県庁が保有していた貨幣は貸付金を含めて四万五千六百六十七兩に達していたことが窺える。貸付残や焼却分の残り三万三千六百三十四兩が政府への上納分であった。この準備金は政府に収納され、新たに藩札交換用に新貨が下付されるが、さきに交換必要藩札額は七万三千〇〇四兩とみたので、約四四％分を政府は準備金の上納によって補填したことになる。

明治六年一月に佐賀県参事石井邦猷は井上大蔵大輔に引き換え用金札の下付を願ったが、その願い出案には次のように書かれている。⁹⁾

元佐賀小城両県ニ於テ製造預金札御引換大蔵省江願

元佐賀小城両縣ニ於テ預金札製造高之内上納并支消等ノ分ハ差引別紙調書之通ニ依条、引換用新札ヲ以テ左ニ記載之金數御下渡被下度奉願義ニ御座候、因テ紙幣寮宛ノ令状御下渡被下度、此段奉願候也

一新札三拾五万円

是ハ元佐賀製造預金札引換用

一貳万円

是ハ元小城製造預金札引右同

小以新札三拾七万円

(明治六年)
一月十三日

佐賀県参事石井邦猷

井上大蔵大輔殿

同 權令多久茂族

ここでは佐賀藩と小城藩が発行した藩札交換用の新札三七万円の下付を願ひ出ていることが分かる。預金札五万三千九百四十圓余が発行されており、可成り多額の発行額であつた。このうち一萬三千五百圓余が明治辛未八月までに引き換えられているが、明治六年一月段階ではまだ三萬三千三百六圓が未引換である。このうち三萬三千三百六圓は正税や石代納等で回収されるとし、残り三五万円を新貨幣での下付を申し出ている。

小城藩においては藩札が四萬四千三百四十圓が発行されている。このうち一萬二千五百四十圓が壬申二月から同三月までに引き換え焼捨てられている。残札三萬二千三百四十圓のうち一萬二千三百四十圓は、表記にあるように下付されている新札や石代納で回収されるとし、残札二万円に対する新札の下付を願ひ出ている。

一八七二年十一月段階では新札四萬一千三百圓の下付を願ひ出ていたが、七三年一月では三七万円になっている。このうち佐賀藩製造の預金札の引換用分は三五万円である。藩札が正税や石代納などで回収される分を除いたため、新札下付願ひ額が少なくなっている。

佐賀県の申請に対して、政府は七三年一月二十九日に大蔵大輔井上馨名で、次のような指示を出した。⁽¹⁾

書面旧佐賀藩札引換金之内新札三拾万円大坂出張紙幣寮ニおゐて下渡候条、令参事調印之証書ヲ以紙幣寮ヨリ令状請取、新貨価五錢以上又者五錢以内ニ而茂損壞等ニ而押印難出来候手續書才四条之通取行、当一月十日相達候通糊封之上、同月十五日相達候趣ヲ以派出官員請取候迄取締方嚴重致置可申候事

明治六年
一月十九日

大蔵大輔井上 馨

新札三十万円を大阪で下付する旨が記されている。また、損耗札などについての指示も出している。また、一八七三年二月十八日には大蔵大輔井上馨名で

書面佐賀小城兩県ニ於テ製造預金札上納并支消等之残引換用新札可下渡ハ条、当一月廿日相違ハ通官員派出先申立引換金請取イ様可致事

と、申し出の通り新札を引き換えのために渡すことを明らかにしている。

注 1) 「諸願伺書類」明治五年第二百三十五号、「官省進達」明治五年十一月分。

(2) 「諸願伺届書控」明治五年。

(3) 「官省進達」明治五年十一月分第二百四十号、「諸願伺届書控」明治五年。

(4) 「諸願伺届書控」明治六年一月ヨリ二月迄五号、「官省進達」明治六年自一月到二月。

(5) 「官省進達」明治五年十一月分。

(6) 同右、明治六年自一月到二月第十号。

四 佐賀藩札と新貨との交換開始時の様相

佐賀藩札の整理が政府の政策によつて必要になつたが、一八七二年九月に佐賀県は磨減した佐賀藩札の新札との交換を願ひ出て、「藩札引換用新札二万円御下渡願ニ付伺」を提出した。

元佐賀藩金預札之内、手摺レ磨減シテ通用渋滞下民難渋ニ付、右引換用普通之楮幣二万円御下渡奉願ハ処、願出通新札二万円被御下渡旨御附紙相成ハニ付、別紙証書之通御下渡被下渡奉願候也

壬申
九月

井上大蔵大輔殿

佐賀県權令多久茂族

新札下布を願っているが、手摺と磨滅した藩札が新札二万円に相当するほど出ている。かなり流通していたことが窺える。二朱札と一朱札の手摺と磨滅が進んでいることは、次のような記述にも出ている。²⁾

二朱壹朱小札之分製造高合札壹万七千百零七両五十六文二分之分、手摺磨滅シテ通用難相成ニ付、右引換之通不
相立候テハ下方難決

とあり、貳朱、一朱札の損耗度が高いことを記している。預金札の品質が悪く、流通にも支障をきたし、それがために新貨幣との交換が必要になり、新貨二万円の下付を要望して、それが認められている。この二万円は金預札の二分札、一分札、二朱札、一朱札との交換用のものだったことは、新貨幣の受取証の案文に出ている。³⁾

証

新札貳万円也

但旧佐賀藩製造金預紙幣二分一分札之所磨滅之分、且又二朱一朱之小札悉皆御引換金

右正請取候也

壬申
九月廿九日

紙幣頭芳川頭正殿

と交換される金預札の種類が記されている。

前記の願いに対して、政府は大蔵大輔井上馨名で、次のように一八八二年九月三日に指示している。⁴⁾

書面申出之通新札二万円下渡候、權令參事調印之証書ヲ以紙幣察ヲ受取之引換藩金札ハ今度相違ハ手續ヲ以大坂出張同察江上納可致候事

新札二万円を下付するとし、それと交換した旧札は大坂紙幣寮に納入するように指示し、品質の悪い預金札を回収しようとしている。

佐賀県權令多久茂族

預金札は、大量の札が短期間に製造されたために、品質が劣り問題になっていたが、これが新札と交換されるようになった。政府の新札下付の指示に対して、佐賀県は、一八八二年九月に新札の引き渡しを願い出た。佐賀県權令多久茂族は井上大蔵大輔に「元佐賀藩製造銀札御引付ニ付願」と題する書類を提出した。

元佐賀藩製造銀札之義、金壹円ニ付銀札六拾八匁換ニシテ通用致シ来候処、錢相場無之ニ付、東京大坂平均相場之比較ヲ以テ銀札七十四匁八分ヲ新貨壹円ニ被相定候段去月十八日出之御指令、同月廿八日到着ニ付、右御改正之御趣意ヲ以テ及諭達、翌廿九日ヨリ別紙比較表之通令通用候、就テハ旧藩発行通用之紙幣差向五錢以上之分ヨリ交換相始、五錢未滿之分ハ新貨相当之価位押印之上令通用候様先般被相違候ニ付、現今散布之銀札各種調査之内五錢以上之分引換用新札ニ而四拾壹万三千円御下ケ渡し被下度、尤新札壹円以上之札而已ニテハ民間通用方不弁利ニ付、小札取交上御渡シ被下度奉願儀ニ御座候、因テ大坂出張紙幣寮宛江今般御下渡被下度此段奉願候也

佐賀県参事石井邦猷

佐賀県權令多久茂族

井上大蔵大輔殿

佐賀藩藩札と新札との交換比価設定の経緯にふれた後、政府指示の比価で交換を行うため、新札の下布を願っている。五錢以上に藩札引換用として新札四一万三〇〇〇円の下布を申し出ている。なお、この折に表7のような新貨と藩札との価格比較表が添付されているが、これは金一円に付銀札七十四匁八分替えとしたもので、各種藩札と新貨との比価は次のように設定されていた。銀札二〇匁が新貨で二六錢七厘と定められ、以下各種の藩札もさきの比価を基礎に五捨六入の法で計算されている。なお、この折に五錢以上と以下の銀札総額が示されているが、それは前者では銀札四万二〇九二貫一九八匁四分六厘となっており、これを一円に付銀札七十四匁八分替で算定すれば金四一万三〇〇四円六九錢二厘になり、後者は一四万九七二三円である。なお、この折に佐賀藩が製造した銀札の製造

表7 政府設定の銀札と
新貨の比価

銀 札	新貨価
2 分	3 厘
3 分	4 厘
5 分	7 厘
8 分	1 銭 1 厘
1 匁	1 銭 3 厘
2 分	2 銭 7 厘
3 匁	4 銭
5 匁	6 銭 7 厘
8 匁	10 銭 7 厘
10 匁	12 銭 3 厘
15 匁	20 銭
20 匁	26 銭 7 厘

注「官省進達」(明治五年十一月分) 第235号より作成。

高、各種銀札枚数、その代銀が書き上げられている。詳しく調査されている。

銀札総額四万二〇九二貫一九匁四分、これは金一円につき七八匁四分とした場合、五六万二七二七円五三銭に当たるとしている。膨大な銀札が発行されていたことが、ここにも出ている。各種銀札の発行

枚数をみれば、小額銀札の発行数が多い。二〇匁札が三九万余枚、一五匁札三四万九五八九枚、一〇匁札六四万四六八五枚とあり、これ自体可成りな枚数であるが、五匁札は一五八万八四八六枚と八匁以上の枚数と比べると格段に多い。三匁札一五八万余、二匁札一四一万余、一匁札一九八万余、五分札二二四万余、三分札一六五万余といずれも百万枚以上発行されており、八匁札以上が六四万以下であるのに対して著しく多い。小額銀札の発行枚数が格段が多いことは、銀札が流通手段として機能していたことを示すものであろう。

注(1) 「諸願伺届書控」明治五年。

(2) 「官省進達」明治五年自五月到九月。

(3) 同。

(4) 同。

(5) 「官省進達」明治五年十一月分第二百三十五号。

五 むすびにかえて

佐賀藩が発行していた藩札の新貨幣との交換比価の決定過程と交換必要額について検討した。交換比価の決定に際しては、佐賀藩内の従来の金銀相場は余り考慮されていない。一八六八年五月の銀目廃止によって、銀貨流通がなくなり、金貨と銭貨のみの流通になったということが前提されている。藩札と新貨との交換比価においては、一八七一年七月十四日の藩札価格が基準とされたが、銀札においては、銭貨との比価によって設定することが求められていた。銭貨相場がない折は東京・大阪平均相場を用いるとしたが、佐賀県は、従来旧佐賀藩領域内では銭相場がないので、旧来の銀相場を基準にして交換比価を定めることを求め、金一円に対して銀六八匁の設定を要望した。これに対して政府は、銭相場がないとすれば、東京・大阪平均相場を用いるとして銀七四匁八分に定めた。佐賀県の要望に対して一〇%の削減であった。銀目廃止による影響が藩札交換時に如実に出てきている。政府政策の強要ともいえる内容であった。

藩札発行高と流通高についての検討では、銀札を金一円に対して銀七四匁八分とした場合五六万二七二七円あり、このうち、五錢以上が四一万三〇〇四円あった。また、預金札は五五万三六九四円発行されていたが、既引換分と正税や石代納金などの残金三五万円あり、両者計七六万余が交換必要額であった。銀札、預金札両者の発行総額の約二四%程度は、石代納金、既引換などによって処理されていた。石代納の推進と藩札で租税を上納することが認められたことによって、藩札で上納がすすめられた結果、実際の交換額は発行額より少なくなっていた。しかし、まだ多額の藩札が流通していたことから、藩札と新貨との交換は重要な課題であった。特に旧佐賀藩では藩札が領内では基軸通貨とされていたことから、新貨幣制度を地域に設定していく上では、藩札と新貨との交換は重要であった。これは旧佐賀藩領域の住民にとっては、新貨幣制度に強制的に組み込まれることであったが、とりわけ銀価

格の一〇％削減の上でそれが推進されることから、価値収奪を受けた上でのことであるだけに、維新政府の進める新貨政策は住民との矛盾を形成するものであつた。